

教員養成に力を入れている大学特集

注目大学の秘密に迫る 皇學館大学

—中高教員採用支える新設組織が効果—

三重県伊勢市の伊勢神宮のおひざ元にある皇學館には140余年の歴史がある。戦後、神道指令で廃校の憂き目にあったが、1962年に私立大学として再興され、神職の養成と併せて、教員養成でも力を発揮してきた。小学校教員の就職者数は全国の私学でトップ10に入る存在だ。だが近年では教員就職率が下がり、中学校や高校、特に高校の教員輩出という点で低迷しているという悩みがあった。そこで中高の教員の就職を後押しする組織「倉志会」を作り、効果をあげているようだ。さらに文系だけの大学から脱皮しようと、理系の教員養成にも本格的に乗り出し、受験生の関心を高めている。「倉志会」の春期特別講座を一日じっくりと聞かせてもらった。

「協同出版・教職課程レポート」編集長 中西 茂

「倉山会」と「倉志会」

皇學館大学には「倉山会」と「倉志会」がある。「倉」は、大学の所在地で神宮関連施設も多い「倉田山」に由来する。

「倉山会」は三重県内の皇學館出身者の教員の会で歴史は古い。一方、「倉志会」は中学校や高校の教員を目指す学生とその学生を支援する組織で、2018年に誕生、2019年度から具体的な活動が始まった。

その「倉志会」が年2回行う特別講座のうち、2023年度の春期特別講座は、秋学期の授業や試験が終わって間もない、建国記念の日の振替休日の2月12日に行われた。参加した学生は40人近く。このうちの約半数は1年生だった。



服部直美教授

「倉志会」リーダーを務める文学部国史学科の遠藤慶太教授が冒頭、「教員採用試験対策でこんなに手厚い大学はない」と強調する。この日の講座も午前9時半から午後5時までで予定がびっしりだ。

同学科の服部直美教授は、「3連休の3日目によく来てくれました」としたうえで、マイクを持って教室を回りながら、「耳にタコができていないかもしれないけれど、なぜあなたは教師を目指したのか。なぜ中学校なのか、高校なのか。なぜ国語科なのか、社会科なのか。そして、どんな先生になりたいのか、考えてほしい」と語りかけた。

ある意味で当然の問いかけだが、地元の教員採用試験の2次試験の提出書類で、常に志望動機と理想とする教師像を書くことを求められてきたからでもある。

服部教授は、1,700人を超えるという「倉山会」の会員数をあげて、「皇學館ってすごいんですよ」と学生を鼓舞することも忘れない。「倉山会」の名簿には、会員がどの学校や教育委員会に勤務しているかがすべてわかることに驚く。

服部教授は、この日の前々日に読売新聞が報じたニュースを取り上げた。次の学習指導要領では、小中学校の一コマの授業時間を5分ずつ短くして、短縮分を学校の裁量に任せることになるかもしれないという特ダネだった。

「このニュースを知っている人は？」という問いかけに、大半の学生が手を挙げた。教育に関するニュースにも敏感なことがわかる。ただ服部教授は、「どう思う？自分なりの考えをもっていてほしい」とクギを刺すことも忘れない。

さらに、「教師たるもの、五者（学者、役者、医者、芸者、易者）であれ」という、昔からの格言も引きながら、いま現場で求められることや、これから意識してほしいことを伝えて話を終えた。

なお、現場で求められることについては、へこたれないこと（失敗を恐れない）、コミュニケーション能力が大切、ひとりで抱え込まないことなど、挫折しがちな若い世代へのメッセージが濃い内容となった。

実践的な生徒指導対応も学ぶ

次の講師は、中学校教師だった三重県鈴鹿市の教育委員会教育支援課学校支援グループの湯浅直樹さん。タイトルは「生徒指導・保護者対応～学校現場のリアルを知る～」。生徒指導の事例検討というまさに実践的な時間だった。生徒指導には、教員になったらすぐにでも直面する問題が山積している。例えば、欠席の連絡が専用のフォームで母親から届いた場合。「娘が学校に行きたくないと言っています。理由は答えようとしません。クラスで気になることはありませんか」といった内容に、担任としてどのような対応をしますか、といった課題が出された。



ロールプレイで4年生が見本を見せる

「まず母親に電話をする」「調査をすると伝える」などと受講生が答えていく。ペアやグループで話し合う時間もあった。

湯浅さんは、「連絡は早い方がいい。学年主任に報告するにしても、自分でも…」「もしクラスでその生徒の様子を聞いたら、母親に了承を取った方がいい」などと、教員になったばかりでも直面するかもしれない

課題を、具体的かつ丁寧に説明する。

圧巻だったのは、自傷行為がわかった女子生徒への対応に関するやりとりのロールプレイの時間だった。採用試験に合格した4年生男女2人がペアで見本を見せる。そのやりとりがさすが合格者だと思わせるやりとりだったのだ。下級生は納得したに違いない。

ここでも湯浅さんが、「母親に伝えるか（伝えるべき）」「他の先生に言うか（ひとりで抱え込まない）」「どんな声をかけるか（深掘りはしない）」「手首を確認するか（虚言の場合もあり、できるだけ確認）」といった対応について、4年生のやりとりを引き合いに出しながら解説した。

午後からは卒業から3年以内の若い教員による座談会や相談会が、たつぷりと時間をとって行われ、参加者は、教職の魅力とともに、実際に先生になってからの日常も聞いた。こうした話題も、教職を志すモチベーションを維持していくうえで大切な情報だろう。

教員就職者、就職率は上向きに

2021年には「倉志会」の姉妹組織とも言える小学校教員志望者向けの支援組織である「つばさ」もできている。学内に模擬授業などもできる学習スペースもった「百船（ももふね）」も整備した。

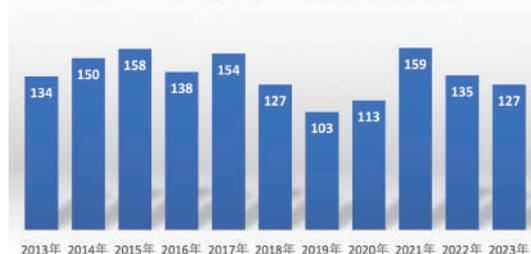


若手卒業生の座談会

「倉志会」ができてからの小中高校、特別支援学校の教員就職者は、2023年度卒業生が127人だが、2022年度卒業生が135人、2021年度卒業生が159人。103人まで下がった2019年度卒業生に比べれば上昇傾向と言えるだろう。2013年度以降

20% 台を維持してきた教員就職率も、2018 年度から 10% 台になり、2019 年度は 17% まで落ち込んだが、2021 年度以降は 25%、22.1%、22% と 3 年連続で 20% 台を維持している。

図 皇學館大学の教員就職者数



ただ、教員就職者の多くは小学校教員なので、「倉志会」の効果が本当に表れたと言えるのは、1 年生からの支援の結果がわかるもう少しあとになりそうだ。2021 年度以降の小学校教員の就職者は 106 人、85 人、87 人。これに対し、中学校は 31 人、31 人、19 人、高校は 13 人、15 人、12 人、特別支援学校が 9 人、4 人、9 人という状況だ。

公立学校の中学校の採用試験で現役合格者を見ると、中学校では 2020 年度から 8 人、6 人、9 人、9 人と安定し、高校もこの 4 年間で 4 人の合格者を出している。この 20 年間を見渡しても、2000 年代にはほとんど公立高校の合格者が出ず、中学校の合格者もごく限られていたことを考えると健闘していると言える。

「以前は教員免許取得者のうちどれだけが実際に教員として就職したかということを意識していなかったんです」と、学生支援部教職支援担当課長の岡村知哉さんが打ち明ける。皇學館のように教員輩出に歴史があっても、いや歴史があるからこそ、意識されてこなかったのかもしれない。

また、さまざまな数値について、「急激に教員になる学生が減ってきた時期に、倉志会が立ち上がり、あの手この手で回復した様子が見える」としながらも、「入学者が減っているため、今後、教員になる数も減ると

予想している。教員になる率を維持し、さらに引き上げるには、次の手を考える時期に来ていると思う」と話す。採用試験の合格者数も、今後減ることが予想され、楽観はしていない。

数理教育コースも開設

皇學館大学は文学部(神道, 国文, 国史, コミュニケーションの 4 学科), 教育学部(教育学科), 現代日本社会学部(現代日本社会学科)の 3 学部体制。4 年生を除くと 1 学年の学生が 600 人台の大学だ。

小学校以外では国語科, 社会科, 英語科, 保健体育科の教員を多く輩出し、長く文系の大学と思われてきたが、新たな挑戦も始めている。2023 年度から教育学部教育学科に中学校・高校の数学の教員免許が取得できる「数理教育コース(中高教員)」を開設したのだ。このコースの希望者は 30 人弱となっている。

数理教育コースの開設前には、全学的に文部科学省の数理・データサイエンス・AI 教育プログラムの認定を受けてもいる。ビッグデータを活用する時代には理数教育が欠かせない、という世の中の追い風に乗った形と言えるのかもしれない。

教育学部の志願者は、2021 年度入試が 707 人、2022 年度入試が 687 人だったが、数理教育コースができた 2023 年度が 816 人、2024 年度が 780 人だから、新コースが志願者増に貢献したとみていいのではないかと。

また、2025 年度には、中学・高校の理科教員免許課程の設置に向けても準備を進めている。数学も理科も教員養成ができるようになれば、次の飛躍のきっかけになりそうだ。



模擬授業ができる学習スペースは他の学生も自然と目に入る場所にある(皇學館大学提供)